

T 02
N 69
44

# 日本における統計学の発展

## 第 44 卷

話し手 小田原 登志郎

聞き手 三 渚 信 邦  
奥 野 定 通



1982年2月18日(金)

統計数理研究所にて

10/12  
26032

26032

## ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀦信邦\*、森博美\*、山元周行 (\* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。そのの方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

## 統計局以前——(1) 戦前戦中

奥野 どの先生からも略歴をいただきまして、それを手がかりにお話を伺うことにしております。それで、お伺いすべき事柄も、略歴を拝見しながらということにいたします。しかし、お話をお伺いしている間にまた思いついて、あれもこれもとなるかもしれません。

私どもにとっては、総理府統計局の総務課長におなりになったときからのことしか、記憶がないわけなんですけれども、略歴を拝見しますと、それまでにいろいろな経歴をお持ちですので、一番初めに、総理府統計局以前の時代ということで、簡単に、その辺の幾つかのところをお伺いしたいんです。大変いろいろな役職についていらっしゃるもので……。

小田原 私は鹿児島の旧制第七高等学校を経て、昭和9年に東京大学、当時の東京帝国大学の法学部法律学科を卒業したわけです。法学部では、実はこの間も三渚先生までちょっと申しましたように、三渚さんのご尊父の三渚信三教授に、独逸民法、すなわちBGB（ベーゲーベー、Bürgerliche Gesetz Buch）の講義を伺ったものでございます。全く流れるように、明晰克明な名調子で、試験では私の至って数少ない「優」の1つをいただいております、（笑）これはもう終生の感謝といたすところでございます。このたびはご子息の三渚さんという関係でお話をする事になりましたのは、全くの奇縁であると申すほかはありません。

卒業の前の年に、いわゆる文官試験、正確には高等試験行政科というものに合格いたしまして、やがて官庁入

りということになりました。実は紹介される方がおられまして、当時の内閣（今日の総理府）に入府したわけですね。内閣では、当時満州（いまの中国東北部）の行政を統括した対満事務局という部局に配置されました。これは各省にわたる対満州の行政を調整、統括し、その長を総裁といい、陸軍大臣がこれを兼ねるという仕組みで、すでに世は準戦時体制にあった時期です。対満事務局には、各省からそれぞれ事務官が派遣されて来ているわけです。

三渚 出向ですか。

小田原 出向です。これは内務、外務、あるいは当時の逓信、農林、商工、そういったほとんどの役所を網羅しており、それぞれの役所が満州国、あるいは、関東局と申しましたけれども、旅順、大連を含めた関東州と満鉄附属地を所管した昔の関東庁ですね。この2つに対して、各省がそれぞれ関係を持ちますけれども、ばらばらな接触をしないようにということで、こういう役所がつくられたわけです。しかも中核には陸軍と海軍が入って調整を図った。しかし、事實は陸軍が中心になっておった。

三渚 満州ですからね。

小田原 そういうことでありまして、その対満事務局という役所にいきなり入りました。そして、その出先が満州にあったんです。それが、先ほど申しました関東局なのです。昔は、関東庁といったのですが、ちょっと長くなりますが、これは、こういう仕組みになっていたんですね。満州は、当時、大連と旅順の間に遼東半島、いわゆる関東州というのがありまして、日露戦争後日本が99カ年の租借権を得たのですが、ほかに、大連からずっと鉄道が北

に上っていきまして、奉天を通り、そして長春に至る鉄道が南滿鐵道で、その附屬地を含めて日本の行政権下にあったのです。なお滿鐵、さらにハルピンまで通じて、その北はシベリア鐵道につながっていたんですね。そこで上述したように、日本は関東州というところに、いわゆる租借地を持っていた。それを関東庁が治める。その長を関東長官といていたんです。それともう一つ、さっき申し上げた鐵道がありましょう。奉天とかハルピンとか、その鐵道の沿線、つまり附屬地に対しても、日本はある行政権を持っておったわけで、その行政権も関東庁にあったのです。

ところが、勢いのおもむくところ昭和6年には滿州事変が起こり、軍を中心にして滿州国をつくり上げるということになったものですから、今度は滿州の経営機構を根本的につくり直すことになるわけです。まず、滿州国は独立国家であるから駐滿全權大使が置かれ、関東軍司令官が大使を兼ねる。関東州と附屬地行政を担当した関東長官は関東局という部局の長官になって、これまた駐滿大使館の傘下に入る。それで、いわゆる三位一体という組織ができたんですね。関東軍司令官と駐滿大使と関東局の長官との三つです。しかも形の上では別に滿州国という国をつくった。

三猪 これは独立国ですからね。

小田原 だから、国と国との関係は外務省がやるのです。大使館を置いて特命全權大使、それを関東軍司令官が兼ねる、旅順から新京に移して関東局とし大使館に置く、この長を総長というんですね。軍司令官は兼ねると同時に特命全權大使でもあり、また関東局の長でもあるとい

う三位一体の組織をつくったんです。非常に政治的な仕組みだったんですね。私が赴任しましたのはこの関東庁の後身である関東局という役所だったわけなんです。そういう不思議なところに、しばらく、3年ばかり在任していました。ここに行っているときに、東京では2.26事件が起こっていたんです。

三猪 昭和11年のことですね。

小田原 そう、昭和11年です。大使館の武官がわれわれの部局に飛んできて、「いま東京に大変な事件が起こっている」「何ですか」「それがよくわからぬ。しかし、みんなやられているらしい」というような話でした。

そんなことで、関東局に3年ほど在任しました。学校出たての20歳代でした。

新京というところは昔は長春といったのですが、満州国ができてから、その首都となって新京という名前になりました。

三猪 満州国の皇帝は溥儀。

小田原 そう、溥儀氏。これは前の清の朝の宣統帝。まだ幼少にして帝位についた方ですね。子供のまま、宣統帝として位を継いでおった。清朝から出た嫡系であるということで、満州国の皇帝に選ばれたんですね。初めは執政ということでしたが、間もなく帝位につかれたんですね。しかし、実質は、先ほど申しましたように、関東軍司令官がすべてを仕切っており、一切その指導下にあったのですから、皇帝でありながら、ときどきは軍司令官官邸にいわば行幸になるわけです。つまり、呼びつけられるわけですね。やはり大変厳しい時代でしたね。

われわれは日本の出先機関にいたわけですが、満州国

政府の方には日本の政府部内からどんどん優秀な人材が送り込まれました。星野直樹だとか、椎名悦三郎だとか、各省から、競って人を送ったのでした。いまでも覚えておりますが、岸さん。

三瀬 岸信介さんもそうでしたにね。若い、有能な官僚を送り込んだといえましょうね。

小田原 大蔵省が何といっても多かったですね。それから産業関係、通産省、農林省-----。

三瀬 そのころは商工省ですね。

小田原 私は関東局に3年ばかりおりましてから、改めて対満事務局事務官ということで東京勤務に復帰しました。これは何年ぐらいになっていましたかしら。

三瀬 昭和14年に対満事務局、17年に拓務事務官とありますね。

小田原 そうですね。その対満事務局という役所は、先ほど申しましたように、各省からその省をそれぞれ代表して、1人ずつ事務官が出ておった。総裁は陸軍大臣が兼ねるたてまえで、東条英機であるとか、あるいは板垣征四郎であるとか、畑俊六大将とかといった方々が陸軍大臣となって同時に対満事務局総裁となると、この対満事務局には週に1回は登庁されて、全事務官が食堂に集まりまして、そこで食事をともにしながらいろいろ報告などをするわけです。そのおかげで、親しくこれらの方々にお会いでき印象を深めたことです。東条さんなんていうのは、なかなかきさくな方で、私の出張報告で日本海で浮遊機雷に遭遇した話などしますと、大口あけて笑い、「もう危ないからジッとしているに限るよ」などと軽口をたたいておられました。しかし、一体に気が小

さい人で、よく部下をしかることがありましたね。神経質でね。

三渚 そういう話はよく聞きますね、非常に気の小さい人だったというのは。

小田原 私が満州に行って、関東局におりましたころは、東条さんは関東軍におられて、憲兵司令官というのをやっていました。憲兵司令官となると、私どもの方の関東局の警備部長を兼ねるたてまえでした。後には関東軍参謀長を経て、間もなく陸軍次官に栄進されました。

真っ青になってよくささいなことに怒る人で、手帳をこんなに積んである。ちょうどわれわれの持っているような職員手帳にびっしり書き込んであり、書類を持っていきますと、「待て待て」といって、手帳を出して突き合わせてみまして、「違っている」という。(笑) そういう人でしたね。大きな戦争をするにすれば、少し度胸が-----。

三渚 スケールが小さい。

小田原 日露戦争の昔、大山満州軍司令官が戦地で「きょうはどこかで大砲が鳴っているようだ」といったという話。(笑)

ええと、対満事務局に、そうすると、17年ごろまであったことになっていきますか。

奥野 このとき、商工事務官や企画院事務官と兼任していらっしゃいますけど、商工は何ですか。

小田原 私は対満事務局の事務官でありながら、同時に企画院事務官、ここにも籍を持ったわけです。そして、そこで何したかと申しますと、戦争中ですから、物資動員計画に参画し、特に満州関係の鉄鋼その他の資材関係をやらされたわけです。そうすると、物資の大きなもの



を持っているのが商工省なので、商工省とも兼任することになったのです。

三渚 今度は、17年11月に内務事務官、内務省に移られるわけですね。

小田原 実はその前に対満事務局におりますときに、拓務省の方に移っております。これは拓務省にいた私の上司であった方から、まあもらいがかかって、私あまり行きたくなかったけど、結局拓務省へ移ったんです。これは当時の外地であった朝鮮、台湾、樺太、南洋委任統治区域のパラオなどを所管していました。

三渚 植民地統括ですね。

小田原 その方の行政をしておったんですが、拓務省もその後、だんだん戦局が進展拡大してきましたので、満州、中国ないしは南方統治区域を広く含めた機構をつくる必要があるというので解体をして大東亜省ができることとなり、朝鮮、台湾、樺太は内務省に一局をつくって移ることとなりました。そのときに大東亜省に行くか、それとも内務省へ回るかということになって、私は大東亜省ではなくて、内務省に回ることにしました。

こうして間もなく昭和20年の敗戦の日を迎えました。

三渚 内務事務官で終戦ですね。

小田原 そうです。

## 統計局以前——(2) 終戦処理

小田原 いま進駐してくる、間もなく連合軍の進駐を見ることになる、さあ大変であるというので、ともかくもまず各役所が始めたことは書類の焼却ということとで

した。重要書類をみんながangan持ち出して、毎日毎日役所の裏庭あたりで苦心して焼いたんです。まことに心ないことをしたものです。ですから、いざ占領軍が来て、占領行政を始めようとして、まず資料を要求した。あれを出せ、これを出せ、こういう資料を出せというときに、何にもなかったのです。(笑)

三瀬 その中には統計資料もあったでしょうにね。

小田原 無論そのとおりです。まだ、戦後定着した、データによって事进行处理する習慣がない。統計に対して、それがそんなにも大事なものという意識が少ないのですね。何かごちゃごちゃ書いてある。だから「焼け」といわれたら、むしろ真っ先に統計資料から焼いたんじゃないですか。(笑)

私はそのまましばらく内務省にいて外地の終戦連絡に当たっておりましたが、そのうちに内務省内に調査局という部局ができた。

三瀬 内務省の……？

小田原 内務省の。その意味は、終戦処理の1つなんです。が、特殊物件といったかな、いわば隠匿物資の調査が始まったんです。軍隊が一斉に解体され要員は全員復員して帰郷した際に、それまで軍が貯蔵していた米だ、砂糖だ、しょう油だ、乾パンだと、わんさあるわけですね。それをほうっておきますと、各人が勝手に持ち出してヤミに回すということで、大変だったですね。急遽全国的に物件の所在と数量を調査し正常の配給ルートに乗せるという、とにかくその取り締まりを始めた。いわば消極的な終戦処理の1つですね。

内務省調査局とはそういうことをやる部局だったんで

すが、これはそう長く続く仕事ではありませんので、一段落したところで私は昭和21年に、改めて地方事務官となって島根県経済部長に補されて赴任しました。まだ戦後の混乱期で、妻子とも迎えに来てくれた屈強の県職員たちに守られて、汽車の窓から乗り込むという騒ぎでしたが、県庁のある松江に着いてみますと、穏やかな県民の気風のうちに幹部職員の出迎えを受け、新聞記者のインタビューを受け、官舎も広々とし、ことに食糧事情もかなりよく、まずは好感を持って県庁生活を始めることができました。

私は経済部長として何を一番手がけにかと申しますと、あそこは米産県ですから、米の供出のことになります。米は、要するに全部政府の管理制度の下にあり、農家が生産した米は政府が一定の価格で強制的に買い上げて、一定の計画の下にこれを配給するわけですね。しかし農家は、政府に売り渡すよりは米は自分で売った方が儲かる。いわゆるヤミです。そこで高いヤミ米が出回るというときでしたから、なかなか供出をしない。供米をしない。そこで供米の督励ということが、経済部長の大きな仕事なんです。ほとんど連日各町村を駆けずり回って、地方事務所やそれぞれの団体に計画どおりの供米を依頼督励する。米はある割合の保有米を除いて全部政府が買い上げる。自分で持ってはならぬ、持つのはこれくらいの範囲内といったことで、供米推進するわけですね。そういうことをして供米の督励をして回るのが、一番大きな仕事でしたね。

三瀬 そのころの農林省の作物統計なんかとも、接触が  
おありになったんでしょう。

小田原　そうです。たしか当時は「農林省穀物検査事務所」というのが各県に置かれていたんですね。

三渚　「作報」のまだ前ですね。

小田原　そう、「作物報告事務所」になる前ですね。私が県におりますころから、作報の方へだんだん切りかわってきたように思います。元来食糧管理は農林省自体の仕事ですが、同時に、そのころは県が委託を受けて、供米を督励して回っておりましたね。米を集荷しておさめるのは、まずもって県庁だったと思います。私の部下に農務課長というのがおるわけですが、やはり米の供出督励と集荷の仕事に専心していました。

あるとき、やはり供米の督励に私は補佐官１人と自動車で近隣の町村に出かけまして、とある踏切にさしかかった。ここは「魔の踏切」といわれていたところで、角になってしかも倉が建っていて、前から来る列車がよく見えない地形でした。私の車がちょうど踏切のレールの上に乗った瞬間に動かなくなりました。前に進まないのです。そこへ真向こうから貨物列車の姿があらわれた。運転手は動転し、何もいわずに飛び出していった。私もふっと前を見れば列車がそこへ来ている。瞬間的にドアをあけて土手に転がり落ちたのです。同乗の補佐官も飛び出したが、落ちる瞬間に頭を強く打って、気絶しているんです。えらいことでした。

後年、私はひやかされるんですが、美濃部（亮吉）さんが島根県に出張して、帰ってきての話に、「小田原君、あなたの記念碑が建っていたよ」というんです。「何の話ですか」「『小田原経済部長遭難の地』と碑ができていた（笑）。その話が県内では伝わっているんだね。

さて、1年で地方勤めが終わって、再び東京に帰りました。

三渚 2年ちょっとのようですけど。21年6月からで、23年3月に大蔵大臣秘書官で-----。

小田原 いや、その前がちょっとあるんです。商工省に行ったんです。それは、こういうことです。内務省は占領政策によって解体されることになり、省としては最後の人事異動を行うわけです。そこでこの際出身県に帰りたい者は希望の県に配置しよう。もし東京に戻るつもりならば、その斡旋もしよう。ただし、もう内務省はないのだから、他のどこかに行くことになるということです。ぼくは、くにに帰ってもしようがないし、まだ若いのだし、東京に帰って適当なところに回してもらおう。大体やってきたことは経済の関係だから、通産省(商工省が改名していました)あたりかなということで、結局ひとまず関東甲信越通産局の賠償課長というのをやったんですよ。

三渚 賠償物資の-----。

小田原 そう。これは一種の戦後処理ですが、なかなかめんどうなもので、機械とか施設とか、そういういずれ賠償に充てられるものの整備保管の仕事です。

三渚 ドレーパーなんていうのが来たころですね。

小田原 そうですね。そうして私は東京に移って、まず関東一円の飛行機工場や機械設備を視察して回りました。もう工場などは皆壊れていて、ほとんど人影を見ません。ただわずかの保守要員が残っているだけでした。しかし機械だけはピカピカに磨いたり、整備をやったりしているんですよ。そして油を塗って、これを賠償物品として提供するわけですが、どうも結局は使いものにならなか

ったようです。向こうに行ったところが、機械はくたびれているし。

三瀬 機械そのものはね。

小田原 先方にはまだ技術もないしね。

三瀬 スクラップみたいなものですね。

小田原 そのうちに政局がいろいろ変わって、妻の父北村徳太郎が大蔵大臣に就任したのです。24年でしたかね。

三瀬 年表では23年3月です。そのときは何内閣ですか。

小田原 あれは、初め片山内閣。片山内閣では、北村は運輸大臣でした。それはぼくには関係ないのですが、間もなく内閣総辞職があり、芦田内閣になって、北村は、改めて大蔵大臣ということになった。昭和23年3月のことです。そのときに、自分は民間銀行の出で、役所のこととはさっぱりわからないからその辺を手伝ってくれということで、私はにわかに大蔵大臣秘書官に転じたのです。

奥野 それはどういういきさつですか。

三瀬 北村徳太郎さんは、先生の岳父、奥様のお父さんに当たるわけです。

それは1年ほどですね。

小田原 1年にはなりません、秘書官は。実は本秘書官は、北村の息子で大学を出て、復員したばかりの一也というのがおるんです。間もなく亡くなりましたけれども、これが秘書官。これは特別職でして、特に官吏の資格を必要としないのです。私の場合は大蔵事務官で、兼ねて秘書官事務取り扱いを命ぜられるという形でしたね。だから、私は大臣と大蔵省の人たちとの間の連絡調整に当たっていたわけです。

またよく問題を起こしたんですよ、北村という人は。

大体がかんしゃく持ちだし……。たとえば、後国会に出られた黒金泰美という方が当時の大蔵省の文書課長で、財政方針演説の草稿を作成する役目がある。各局課から演説に盛り込むべき材料を集めてそれを文書課長が編集して、「財政方針演説ができましたから」といって大臣の手元に持参したわけです。そうしたら、その原稿にどんどん筆を入れ始めたのですね。黒金さんぼくのところへ来てばやきまして、「あのね、歴代の大蔵大臣はみんな文書課長の書いたのを大体そのままお読みくださるんですがな」。(笑)

三瀨 心配になってきたんですね。

小田原 「あの人は、自分の銀行でも万事ああいうふう<sup>に</sup>にやってきたのですから。だから、するようにしておきなさい」というほかはなかった。実は北村はキリスト教信者なんですね。ですから、財政演説にも聖書の文句なども入れて独自の草稿をつくったのでしょう。

三瀨 格調高い……。

小田原 「悩める者に慰めを、飢えたる者に食を与えよ……」といった調子でやるわけですね。小坂善太郎さんなどが質問演説で、「クリスチャンであられる大蔵大臣、いかがですか」などとひやかされていましたね。

三瀨 北村徳太郎さんは、根っからの政党人でいらっしゃるんですか。

小田原 いや、大体政治家じゃないんですよ、あの人は。もともと九州で銀行を経営していて、そういう立場から財界人が政治に携わるべきではないという主義で、実際にも政治嫌いでした。

ところが、その土地から代議士に出ている人がページ

になった。あれもページ、これもページ。

三渚 あのところはね。

小田原 それで、やむなく推されて出た。やってみたら、おもしろいんでしょうな。(笑)ただ、自分流でやりますけどね。そういうことで、みずから民主党から自民党にも入りましただけけれども、初めは、賀川豊彦さんと非常に親しかった。賀川さんから「北村君、政治家になるんなら社会党に入れよ」といわれておった。思想的には、むしろ社会党に近いくらい。しかし、やっぱり本領は保守だということで保守党に入ったくらいですから。自由党の中でも最左翼、修正資本主義というのを唱えていましたね。ソ連には都合10回ぐらい訪問していましたね。

三渚 そうでしたね。

小田原 当時の中国の周恩来、ソ連ではミコヤン、フルシチョフなどとは非常に親しかったし、結構話も通じたようです。ある年など、羽田まで帰国を迎えに行ってみますと、なかなか出てこないんです。乗客が皆出てしまってから、ようやく荷物が出てくるところから、私服に取り巻かれて出てきました。護衛されているのか護送されているのかわからないくらいでした。(笑)

そんなこんなで1年足らずを過ごしましたが、そろそろ実際業務に復帰したいとぼくの方から北村に乞うて、改めて通産省は石炭庁の課長に復帰したのでした。昭和23年8月のことになります。

三渚 そこから、いよいよ通産省雑貨統計課長として統計との縁が始まるわけですね。

奥野 そうしますと、役人にお歸りになったのは、結局通産省-----。



三瀬 肩書きとしては雑貨統計課長で、初めて統計にかかわりができるんですね。

小田原 そうですね。

それで、石炭庁に行っていたころがあるんですね。

奥野 そうですか。

小田原 ぼくは、けさになって文庫をかき回しておりましたら、官途についてからの辞令がまとまって出てきましてね。昔の辞令とはこういうものだったのですよ。

三瀬 拝見したいですね。いまは、薄っぺらな紙1枚。

小田原 そうですね。

奥野 タイプで打ってね。

小田原 こういうことをすべきじゃないけれども、ご参考になるならどうぞ。

三瀬 ぜひ拝見したい。

さて、正木千冬さんとのおつき合いは、通産省雑貨統計課長の時ですか。

小田原 すれ違いだったと思います。正木さんは一時、調査統計局長をしておられて、それから統計委員会ができて、統計委員会の委員になられましたね。

奥野 常任委員です。常任委員制度ができたんです。美濃部さんと一緒です。

小田原 そうですね。その前に統計局におられたんですね。

三瀬 そうです。次長をちょっと。

奥野 それから商工省の調査統計局長になられた。

小田原 その後に私がすれ違いに調統に入り、2カ月後今度は総務課長として統計局に入りました。調統のときは豊島陞という人が調査統計部長でした。

三渚 豊島隆、それが正木さんの後で、そのころ入られたわけでしょう。

奥野 商工省が通産省になったとき、正木さんやめたんですよ。調査統計局がなくなって、調査統計部に格下げになったから。それで、部長が豊島さんになった。

### 総理府統計局に移る

三渚 それでいよいよ小田原さんの統計局時代になるわけですね。

奥野 雑貨統計のときは、格別何もおやりにならなかった……？

三渚 統計について、何かご記憶は……。

小田原 24年の5月でしょう。2カ月ですよ。

奥野 だから、格別のことはなかったんですね。

小田原 その年の5月調統に行って、7月には統計局に移りましたのですから。課員の1人から森田先生の「汎論」を贈られ、いよいよ勉強でも始めようという矢先の統計局行きでした。

通産省はわずか2月ですから、何もわけがわからず、豊島さんは同氏が朝鮮総督府以来の知己でもあり、よく、雑貨統計だから、何か雑貨品を見て歩こう。まず資生堂を見に行こうかということになって、資生堂のどこだったかの工場に2人で出かけていきました。何だ、これが資生堂の化粧品か。山のように粘土みたいなものを積み上げて、手でこんなにこねていた。(笑) 何が何だかわからぬけど、きれいな包装なんかしているけど、あんなものは、実際工場に行ってみてごらんなさい、何だかわけ

がわからない、粘土を重ねたようなものだ。そして2人で「やれやれ、これがあなるのか」といって帰ってきたことがありますよ。(笑) そこへ統計局へ移る話があったものだから、豊島さん怒っちゃって、「冗談じゃない、ぼくは反対だ」といきり立っていた。

三渚 統計局に移られる話は、どこからか引、張る人が-----。

小田原 私は、自分の意思で勤務個所を動いたことがないんですけれども、これもまさにそれで、寝耳に水でした。というのは、後で森田先生に伺ったんですが、ぼくはよく知らないけれども、とにかく森田先生から通産省に、今度は総務課長を通産からもらい受けたい、とまあこういう要請をされたようです。それで、それまでの私の前任者に当たる総務課長が竹内要次郎という鉄道省の人でして-----。

奥野 山中さんの次の人です。

小田原 山中さんの次ね。運輸省か鉄道省の畑でしょう。

奥野 そうです。

小田原 この人がやめるということで——どうしてやめるのかわからなかったけれども、やっぱり統計だから、通産あたりから採ろうというようなことでしょうね。しかも一般行政的な人がよい。それから、これはかなり大きな役所だから、年配の人でないといかぬというようなことがあったんじゃないでしょうか。

当時の通産次官をしておられたのが、山本高行という方で、後に富士製鉄の副社長になり、早く亡くなられたんですが、あの人に呼ばれまして、統計局からこういう要請があるから、いろいろ考えたが、あなたが一番年配

的にいい——能力的にじゃなくて、年配的にいいということ、(笑) 向こうに行ってくれませんか、まあ2年も行ってもらえばという話だったんです。それが何と、役人としての生涯を統計局で終えることになった。(笑)

## 国家行政組織法施行

奥野 24年の6月1日に、例の占領下の行政の体制を改めようというので、いろいろ組織改正、法律改正がありましたね。それで国家行政組織法というのが新しくできて、それから、行政委員会なんかはかなり改組をされたりしまして、統計委員会も改組になって、各省の統計部局も、局から部に格下げ、もとへ戻って、そういう改革がありました。その直後に、総務課長におなりになったわけですね。

小田原 そういうことになりましたよね。統計局赴任が24年の夏ですから。

奥野 改革が6月ですから。

小田原 国家行政組織法が施行されて、一定の規格と基準の下に行政組織が整理整頓された時期ですね。

奥野 総務課長というポストは、こういう組織の改正とか何かには、非常に密接な関係のあるポストですか。この改革をどういうふうにごらんになったか。

小田原 着任した時期がいまおっしゃった、国家行政組織法を中軸として各省の設置法が続々制定され、各省にわたる機構改革が一段落して、ややほっとしたころだったかもしれませんね。そのときは私はまだ統計局のことも、ことに統計委員会や他省の統計部局の事情もよくわ

からないころだったのでしょう。

そこでちょっと復習のようなことになるけれども、統計委員会は初め、21年の12月でしたか、官制で出たんですね。その統計委員会が一番先にやった仕事が、統計法の制定でしたね。

奥野 22年の5月です。

小田原 そのときに、統計委員会の規定は統計法に入っていたわけですか。

奥野 しばらく官制で残っていたと思います。それからしばらくして、改正で入った。このとき、統計委員会の委員のメンバーについての規定が少し変わりました。各省代表を入れるというのがはっきり出てきたと思うんです。学識経験者と、それから、統計行政について経験がある者、要するに各省代表を半数以下だけど入れるという規定が入った。

小田原 それが、行政組織法ができた後、つまり24年のことですね。

奥野 そうです。そのとき、常任委員を2人置く制度ができた。これは、それまでに大論争がありましてね。

小田原 そうでしたか。それは、ぼくが統計局に来る直前だったのでしょう。

奥野 そうです。

三渚 相当な変革だものね。

小田原 それまでは統計委員会委員といえば学識経験者ばかりだったのですね。統計部局からは川島内閣統計局長とか日銀の篠原局長ぐらいで、あとは大内先生以下の学者がずらりだったのでしょう。何か雲の上の感じだったわけですね。(笑)

奥野 ご就任になるちょっと前ですから。

小田原 直前ぐらいでしょうね。

奥野 結局、行政組織法が出た時期に、統計委員会の規定は統計法の中に入っちゃったんですね。

三渚 統計法の第6条がいま「削除」となっているから、その辺の事情がよくわかる。

奥野 このすぐ後に、例のシャウプの勧告が出ているんです、8月26日。これは統計組織の地方機構に関係ありますから、統計委員会の方に多く影響ありますけれども、統計局は大スポンサーですから。

小田原 おっしゃるとおりですね。シャウプ勧告というのは、地方に対する国の補助金の種類を厳しく整理縮減して、必要な地方財政の不足額は地方財政平衡交付金で賄えというのですね。費目ごとに特定はしないで、交付金に算入してあるというお墨つき、つまりひもだけつけておいて、しかも実際はそのひもがちっとも生かされぬ、つまり予算が回ってこないというのが、ぼくらが地方に出ましても聞かされる苦情でしたね。もっともあれは県の方の統計専任職員費は従前どおり残ったんでしたね、全額国庫負担の予算に計上されて。市町村分だけ平衡交付金に組み入れられたのです。

奥野 そうです。県は残りました。

小田原 だから市町村がブーブー言い出したのも無理はありません。それ以前は、国庫負担でひとしく県と市町村に配付されておったんですからね。それが切れた。交付金の中に入っておるというから折衝してみても、一向に予算は回ってこないということでしたね。それがシャウプの勧告の実態でしたね。

奥野 この辺はそういう税制改革にも絡んで、統計局総務課長のところへ、県から突き上げとか何かいろんな話があったり、各省との関係であったりしたのではないかなと思って……。

小田原 それはずいぶんありましたね。もう、必ず聞かされたですね。どうしようもないので、われわれはよく知らぬ。これは行政管理庁の方でやっておられるのだからそちらの方へと……。(笑)

### 高級官吏試験のこと

小田原 そういえば総務課長の時、高級官吏試験というのをぼくは受けさせられたな。

奥野 これをちょっと……。

小田原 あれは一種のページの意図があったんですね。占領軍は大体において、日本の官吏というものに対して非常に不信の念が強かった。うそばかりいっておる。日本の役人というのは、自分ではあまり物を知らぬくせに、つじつまばかり合わせておる。何か聞いても、必ずだれか連れてこないと答弁もできない。専門家になり切っていない、といったような見方をされていたんですね。学者、先生といった方々は信用があった。だから学者が多く登用されたわけで、文部大臣とか石炭庁長官などが記憶にありますね。統計の場合は、むしろ学者先生方の方から働きかけて出てこられたと見てよいでしょうけれど。

一般的に日本の役人というのは、いっそのこと、終戦と同時に、進駐と同時にページをしてしまって、新たに

入れかえるというのがいいのではないかといった思想があったように私は感じています。しかし、もうそれなりにいろいろと動き出したものだから、何とかして整理をせねばなるまい……というのが高級官吏試験として出現したんではないかと思います。

これは、官吏一般にとっては非常なショックであり、屈辱感を覚えさせられましたね。つまり、あのときはこうでしょう。それぞれのポジション、何々局長、何々課長、これを一般から募集したわけですね。電車に「高級官吏志望の者は人事院へ」といったポスターがぶら下がっていましたよ。何々局長、何々課長になりたい人は申し込みなさいという広告がつられていたのでした。しかし実際問題としては、ああいうことをしてみても、ほとんど申し込む人はなかっただろうと思いますけれども、そういうふうにして一般と肩を並べて試験を受けさせたのです。

朝早く弁当をつくらせて、鉛筆を削って、子供たちに見送られて試験場に向かいましたよ。

マルチョイ式というのも初めての経験でしたね。どういふものかよくわからないんだけど、答案用紙は簡単だが、問題集が膨大な冊子で、5つの中から正解と思われる数字1個を選別するわけですね。

三瀬 マルチチョイス式ね。

小田原 チョイスということがよくわからなかったんですよ、みんな。1つずつ、こうでもないああでもないと考えてやっていくと、時間的には間に合いそうにない。むしろ感じで、「これだ」とパッとやる。いまの子供たちは早いと思うんです。パッパッといかぬと間に合わぬ。



昔の試験みたいに、考えておったんでは時間が足りませんよ。

奥野 そんなに出ていたんですか。

小田原 問題集がこういう冊子になっている。答案用紙は1枚ですよ。これはマルを書けばいいんだから。問題がこんなに厚い。たしか時間は無制限だったんでしょ。後に文部次官になられたある方は、朝早くから電気がつくまで1人でがんばっておられたとか、中には、人をバカにしておるといって、途中で出てこられたとかいう人もいました。

そういうことで、私も、総務課長をだれかが狙ってあるということになれば、(笑) 受けざるを得ぬということで受けまして、幸い、一般行政職というので、これはまあそのまま通してもらったんですね。その次に、専門職として統計職を皆さん統計局の幹部の人は受けなきゃならぬ。私も統計にやっかいになっているのだからというので、半ばやじうまで、一緒に受けることにしました。

これはいっていいかどうか知らぬけれども、実は森田先生が統計局長であられるので、一般行政は受けなきゃならぬ、というので受けて帰られて、2人で全解答を突き合わせまして、正解と思われる番号の度数分布をつくって見たわけです。そうすると、ともかく正解の集中する形がほぼ出てくるのですね。「これだ」というわけだ。ひとつこれでばくも統計職を受けてみようということになって、(笑) 森田先生の「汎論」に急遽挑戦を開始しました。サーッと読んで、わかるところだけは埋めていって、わからぬところは飛ばしていくということで、「汎論」の各ページは赤鉛筆で真っ赤になる騒ぎでした。そうして

試験に臨んでみますと、やっぱり、わかるものもありますけれども、大半はわからない。わからぬものは度数方式にしようとやって……。 (笑)

三渚 度数の多いところでいこう。

小田原 そうすると、不思議や、そのうち、何分の1かは合っているんですね。

三渚 確率ですね。

奥野 この時期に、いまでも歴史的だといわれる、戦後初めてのISIに、森田先生、大内先生、美濃部先生が飛行機に乗ってスイスのベルンへ行きましたね。

小田原 あれはいつでしたか。

奥野 24年の9月なんです。ですから、総務課長におなりになってすぐですよ。

小田原 そうそう、ぼくは先生の奥様と羽田まで見送りに行きましたな。そして帰ってみえて、やがて帰国報告をされましたね。大内先生が総括的な報告をされて、ここから先は美濃部君、ここからは森田君と一々指図しておられましたね。森田先生は、ひとしきり丁重に話されて、「もうありません、先生このくらいいいですか」と大内さんに聞くと、先生は「いや、まだまだ」といって、 (笑) お許しが出ない。森田先生は構わずにやめてしまったことがあるんですね。実際はあの時期のお三人の旅は大変だったと思います。

三渚 森田先生の「統計遍歴」なんかにございますね。

小田原 出てますか。とにかく三人ともかなりくたびれたようですね。

三渚 まだジェット機もないし。

小田原 お話しの「統計遍歴」はほんとにおもしろい。

三渚 森田さんならではの。

小田原 本当に見えるように書いておられますね。昔の資料などかなり克明にとっておられるんですね。

## 25年国勢調査

奥野 森田先生なんかがベルンへ行かれた後、前後して、25年の国勢調査の予算の問題が起こっているはずなんですけれども、それは総務課長の当然の職責で、25年の国調というのは大きな国調でしたから。

小田原 25年の国調ですか。

奥野 だと思いますが。50年センサスでしょう。

三渚 そう、50年センサスです。

奥野 何かご記憶はありませんか。

小田原 予算の獲得は、ばくは額は思い出しませんけれども、何億とっていただいでしょう。結果的には30億、40億になりましたからね。急にはとれませんけれども。

それに関連して、集計要員の問題があったんです。当時は、国調集計のピーク時になりますと、製表要員は3000人を超えました。そして、そのうちの約1000人は、いわゆる臨時集計員。ですから、大規模の国勢調査の年から2～3年の間は、ピークになるわけですね。そしてそれをだんだん減らしてって、2000人、1000人台に減らしました。減らすというのは、大変な総務課長の仕事でしたね。

三渚 組合が強かったからね、総理府は。集計雇員といったんでしょうか。

小田原 どうもそのころは臨時集計員といったかと思います。この集計員の問題は国勢調査をやる部局の宿命といってよいでしょう。何と云っても、国勢調査ほどの事務量を持った調査はないんだから、集計員数もピーク時とボトム時とでは大きく変動せざるを得ない。予算もピーク時には格別大型になりますが、予算をとると同時に、一番頭の痛かったのは、そのことよりも、人間の問題。ふやしてくるときはいいけれども、減らす場合には大きなトラブルを伴います。

統計局では、女子職員が大体8割です。しかも大体は、若い高校出たばかりですね。平均年齢が20歳前後ですよ。その中には、したがって、いまでも盛んにやっていますが、成人の日に統計局内の「成人式」というのをそのころ始めた。ある年、多分27~28年でしたかな、636人だったか、ちょっと数字は忘れたんですが、その年に成人になる者が全部女の子でした。それが翌年になりますと、もう百八十何人かになった。そのことは、臨時集計員がそれだけ減少していることを意味しています。

統計局の悩みは、当時は、国勢調査を持つためにコンスタントな職員構成になり得ない。国調の集計が済むと今度は人員を順次減らしていかなければならぬ。そして数年たつとまた急にバーツとふやさねばならぬ。この人員構造は何とかせねばいかぬというのが、私の総務課長、調査部長、局長の各時代を通じての悩みでしたね。それがいまはほとんど解消されましたね。機械化が進んだことと、大規模調査や委託集計などが配置されて、コンスタントに、ある程度ならした人員構成をすることができるようになったことによるものでしょう。

三瀦 25年国調の10月のときは、すでに経済部長をや、ていらっしゃるんですね。25年8月から。

小田原 そうですね。

三瀦 そうすると、経済部長の前任者は末永茂喜さんですか。

小田原 そうです。

三瀦 そのころ鮫島龍行さんなんかは、どういうところに-----？

小田原 鮫島さんは多分、経済部の第二課長あたりだったかと思います。

三瀦 末永さんは東北大に行かれたんですね。

小田原 そう。

三瀦 それできっと、小田原さんにバトンタッチされたんですね。

小田原 いや、バトンタッチといっても、ぼくは総務課長としては、とにかく統計局に来たけれども、統計専門家というわけでもなし、いずれ通産にでも戻されるんだろうし、末永さんの後の経済部長というお話はどうかなあと首かしげましたが、森田先生に強く勧められまして、結局お受けすることになったんです。

三瀦 末永さんのご記憶は-----？

小田原 無論よく存じています。

三瀦 九州で亡くなられましたけれども、何か記憶をお持ちですか。

小田原 末永さんは非常にきさくな方で、ああいう緻密な学問をしていらっしゃるんだけれども、らいらくで、若い連中と盛んに酒をあおって氣勢を上げておられる。ぼくもときおりはご注意を申したことがある。役所がひ

けてから、ご自分の部屋へアルコールなど持ち込んで当時の若い明石君などという連中と楽しまれる。

奥野 そうだ、何か飲み会やったじゃないですか。永山さんと一緒に飲んだことがあります。

小田原 永山さん、ちょっと病気したんですよ。あれはいつごろだったかね。そこで同君にも「大体ね、5時過ぎてから経済部長室のあたりをうろうろしているのはだれだ」といったら、「それは人違いでしょう」(笑)とやり返されたことがあります。末永さんは本当にりっぱな方だったですね。J. S. ミルのご専門で、岩波文庫の「経済学原理」の訳本を次々といただきましたね。

三猪 学説史の専門ですね。

小田原 そうでしたね。

ちょっと、ここで前に返るけれども、25年国勢調査での思い出の1つに、国勢調査の宣伝用に映画をつくった話があります。

三猪 PRの映画。

小田原 そう、初めてそういうものをつくった。あまりよくはできてないので、市中の映画館に回したんですけれども、ほとんど上映してくれなかったようです。その中に三笠宮が登場される場面があるんです。実はぼくが調査員になって宮様に質問するわけです。それで、三笠宮のお宅に伺って……。

三猪 それは映画の上でですか。

小田原 無論、そうです。

事前に宮邸に伺って、撮影技師からいろいろ打ち合わせがあって、それから宮様が出てこられました。「きょうは10月1日のつもりでひとつお伺いいたします。よろし

くお願いいたします」とまず申し上げて、「どうぞどうぞ、何でも」「妃殿下はいらっしゃいますか」「2階にいます」「子供さんは何人で」「いっぱいいるよ」という問答で終わりました。(笑)私のような役者が出たのがまずいのと、年配の技師がおかしいくらいしゃちほこばったのが、どうもあまりよくなかったですね。

三渚 そのとき国勢調査をやっていた課は、経済部ですか。

小田原 いや、人口部。友安さんの方です。

三渚 人口部長のね。

小田原 人口課長です。松浦さんが課長でやった時期もあるんですね。

奥野 人口一課長、松浦さん。

小田原 松浦素さんは、九州平戸の殿様ですから。

三渚 松浦伯爵ですね。

小田原 年に1度か2度平戸に帰られると、ぼくなどここでは気やすくおつき合いくれたんだけど、向こうでは大変でした。昔の家老職みたいな人たちがずっと途中までお出迎えに出ていきまして、しずしずとお帰りになる。「家には頻繁にお帰りになるの」と聞くと、「いや、一遍帰ると、あの調子だから大変です。肩はこるし、何かと物入りだし……」という話でしたね。

## アメリカ出張

奥野 部長時代の方に移ります。経済部長の時代と、引き続き調査部長の時代がございますね。ですから、これをひっくるめて、長い間アメリカへ行っていた78日

間の旅行のいきさつと、何をおやりになったか。いまではこんな長期の出張あり得ませんので。

小田原 大体、あり得るはずがなかったんですよ。(笑)  
 といいますのは、アメリカ出張となれば、まだG H Qのあるときですから、その向きの許可を得なければならぬ。統計局からしかるべき者を勉強に出したいと折衝の結果、G H Qの方がひとまず通ったのです。そこで、局長から相談がありまして、だれかと思うけれども——いっていかどうか知らぬが、実は当時研究課長の山田善二郎君、このあたりを一遍出そうかということだったんです。ただ、内示があった段階では、いきなり山田君の名前を出すのは、ちょっとはばかられたわけです。部内事情でね。いわゆる順序とか、いろいろありますからね。それでとりあえず、小田原さん、あなたの名前で申し込んでおきましょう、こういうことだったんです。私も気軽にいいでしょうと答えた。

そうして、そのうちに大分時日がたっていよいよ手続の段階になって、やっと山田君の名前を出したわけです。そうするとG H Qが「これは何だ」というわけです。これには「小田原」となっている。小田原以外は認めないということになりまして、これはえらいことになった。(笑)とんでもない話で、アメリカへ行くの、統計の勉強をするのなんて気はこっちにはまるでないんだから。しかし、G H Qの仰せはオールマイティだ。泡を食いまして、さあ語学だ、会話練習だ、ということになりました。

それで、鮫島龍行氏だったかな、知っている外人がいるからと、黒人でしたが、進駐軍勤務のあるアメリカ人



を紹介してくれましたし、森田先生はまた、自分も責任があると思われたか、こういうホテルが一番安いから大丈夫だとか、カフェテリアでの食事の仕方だとか、(笑) いろんなことをご教示いただきまして、ようやく出かけていったんですが、あれは何週間ぐらいになりましたかな、大体、続いて3カ月ぐらいだったかな。

奥野 78日間ですよ。

小田原 大半の日程をワシントンD.C. で過ごしましたが、着いてしまえば急にのんびりして、ゆっくり私なりの勉強もできましたね。まず大統領府の統計基準部でライス博士のご指導を受け、美濃部先生あたりと多分同じ部屋、同じ机をもらって10日ほどを過ごしました。

それから、センサス・ビューローに回ってデドリック博士(ライス調査団のメンバー)にお会いして、食堂などへも案内していただき午餐をともにしました。折りからインドのマハラノビス博士などにもお会いしごあいさつをいたしました。基準部ではちょうどライスさんは、2度目の日本への統計調査団長として見えて、帰られたばかり。そしてちょうど、あたかも第2次勧告書、報告書をまとめておられる最中で、こんな長いタイプ刷りの報告書案に真っ黒になるくらいに筆を入れておられ、「ミスター・小田原、ごらんのように、報告書の原稿にこんなに訂正を施している。これをやがて正式にタイプに打って、報告書として送ります」といっておられましたね。ライスという人はなかなかりっぱなお人柄ですね。

三瀨 学者ですものね。

小田原 学者であり、かつ人柄が、なるほど、あの時期の国際統計協会の会長でしょう。非常に困難な時期に、

各国の学者、統計家の信頼を集めておられたですね。

ぼくは実は「コスモスクラブ」という古いクラブでライス博士に一度ごちそうになりました。その折、ぼくはまたつまらぬことをいったんです。ライスさんは髪が真っ白なんですね。そこで「日本の統計関係者の間で先生のことをホワイト・ライスさんなどとお呼びしているんです」といった。そうしたら黙っておられて、「それは私の皮膚が白いからだろうか」とお聞きになるんです。

実は、そのときアメリカへ行っての1つの発見は、この黒人問題の根深さでしたね。

三渚 ぼくらにはちょっと考えつかない。

小田原 これは非常にデリケートな問題で、やはりこういうことがありましたよ。私は実はキリスト教の信者なので、向こうでもある教会を訪ねたんです。大きくてりっぱな建築ですが、案内してくださった牧師夫人の話によると、「近く、私どもは他の場所へ会堂を建てて移るんです」ということだった。「どうしてですか、こんなにりっぱな建築の教会なのに」といったんですが、だんだん話を聞いていてわかってきたことは、そのあたりに黒人が住み出し、教会にも黒人が多くなった。黒人は、住み始めると一気にふえるものらしく、そうなると、土地の白人が自然とほかへ移っていくんですよ。もとの地域はますます黒人の町になってしまう。教会も同様で、黒人が入り込むと、だんだん白人が来なくなる。そこで「この建物は黒人の教会に寄付して、私どもは別に建てよう」というようなことになる。教会や宗教においてさえもそういうことがあったくらいですから、これは根深いものですね。だからライスさんすらも、黒人に対する白かと、

こういうふうに反射的に思われたんでしょ うね。

三渚 日本人の、黄色の方から見て、ホワイトと思われたんですね。

主にはセンサス・ビューローにいらしたんですか。

小田原 センサス・ビューローが、日本の総理府統計局にまあ該当すると思ひまして、ここに一番長くお邪魔してたんです。ピアという人が局長でしたけれども、親しいデドリックさんがたしか次長でした。いただいた机もいすも多分森田先生か美濃部先生がお座りになった机だったかと思ひます。

あそこでは、いろんな資料をいただいて、それを読んだり、不審を尋ねたり、整理したりしておりました。いろんなセンサスをやるんですね。たとえば、その年は砂糖のセンサス。どうやってやるんだろうと思ひたんですが、いわゆる農林センサスの1つです。

私は、そのときのアメリカ行きで1つ勉強してきましたのは、ガバメント・センサス、いわば中央（連邦）地方（州）を通ずる行財政センサスですね。まあ、こちらでいえば、事業所調査に含められておりました。そういうセンサスがあったんです。あれだけ大きな国ですから、連邦や諸州の膨大な仕事をどういうふうに分担して、どれだけの人間が、どういう仕事に携わっておるかということなどは、やはり必要な統計資料になるんでしょ うね。「官公庁センサス」というふうに訳して、一応報告書に書いたことがあります。

三渚 1カ所にいらしたわけですか、ワシントンに。

小田原 ですから、やはり中央統計局を中心にほとんどワシントンD.C.で過ごしました。初めはまずスタティ

ステイカル・スタンダード、つまり統計基準部でライス博士（部長）の指導を受け、レッツバコット氏やウェブ夫人のお世話になりました。それからノカ月ほど後にセンサス・ビューローに移りました。デドリック博士室の前の部屋に机をもらいましたが、そこが長かったんですね。あとはレーバー、労働統計の方に行きましたが、労働省でも、やっぱり机をくれましてね。センサス・ビューローでは、秘書までつけてくれました。何かと話してくれて、なかなかそれはよかった。

そうだ、その最中だ。のうのうとやっていたら、森田先生から航空便で手紙が来たんですよ。読んでみると、小田原さん、あなたは実にいいときに渡米した。いま政府部内で問題になっているのだけれど、吉田（茂）総理が、ある局長の出張申請が何かで判を押すときに見たらしいんだが、いずれも期間が長くて、研修みたいな、視察みたいなことになっている。これは何だ、何の仕事で行くんだ。

三瀬 78日間も。（笑）

小田原 いや、ぼくの方じゃなくて、ほかの人ですよ。ぼくはもう来てしまっているからやむを得ないが。官吏は、これからそういう長期の出張は認めない。行くのは国際会議だけ。その前後に若干の視察をすることは認める。研修出張なんていうのは、一種の短期留学。そういうのは、ぼくら仕事はあったらかして行っているからね。ごもっともですな。（笑）「小田原さんはいいことをした、いいことをした」って、（笑）森田先生はいっておられた。奥野 そうすると、以後はなしですね。

小田原 なし。みんな会議ですよ、行っているのは。I

SIがあるからいいようなものだけれども、研修旅行なんて各省で削減される。

三瀧 美濃部さんはどのくらいですか。

奥野 その前でしょう。

三瀧 いや、期間。

奥野 同じくらい。2～3カ月です。

小田原 みんなそれで行ったんですよ。

奥野 森田先生もそうです。

三瀧 ところで、大学時代に統計学の講義を聞かれたのは有沢先生ですか。法学部ではそんなのなかった……？

小田原 申しわけないけれど、私は統計学の講義というものは聴いておらぬのです。(笑) 法学部にはありませんね。経済学部ならとっているんですけどね。

三瀧 そのころ、有沢先生ですか。

小田原 有沢さんですね。昔の改造社で出した「経済学全集」というのがありましたね。それに有沢さんが統計学を受け持っておられますね。有沢さんの「統計学要論(戦後版)」は先日古本屋で見つけて購入しましたっけ。戦後東大へ復帰されて書かれたものですね。

## 第2次統計使節団

奥野 それでは、アメリカ出張の話はそれぐらいとして、部長時代に、第2次のライスさんの使節団がありますね。これについて、何か特に……。

小田原 私自身は、ライスさんといえば、第2次のときのライスさんしか存じておらぬわけですけど、来日中にもいろんな席に出させていただきまして、お話を伺っ

たことでした。ライスさんとの直接のかかわり合いは、いまお話しした、アメリカに帰られてからのことですね。こちらでは、いろんな旅行されるときには、よくお供したりしましたね。統計局部長の時分、森田局長とご一緒にライス博士と食事をしたり、そういうことはよくあったと思いますね。

セカンド・ライス・ミッションでは、いまいましたデドリックさんとか、デミングさん……。

奥野 デミングさんも入っていました。

小田原 私は、デミングさんはアメリカでお訪ねしたんです。非常に印象に残るのは、日本の統計学者の先生方の統計学の本を、ずらっと並べておられるんですね。

奥野 デミングさん……？

三渚 読めるのかな。

奥野 どうかな。

小田原 いや、先生はお読みになれないんでしょうが、大変ご自慢でしてね。北川先生のご本など指し示して。(笑)というのは、日本がデミングさんを非常に親しくお迎えをして、ああいうふうに盛んに所説を取り入れ、デミング賞など設定したでしょう。やっぱりデミングさんの方でも、日本に非常に親しみを持たれたわけでしょうね。そこの本棚の片っ方の上全体ぐらいに日本の書物がビッシリと入っているんですよ。そういうことが印象的です。

奥野 この時代に、統計報告調整法の制定の問題がありました。これは法律問題でしたけれども、何かこれについて……。直接、統計局としては関係ない法律ですけどね。

小田原 統計局は実施機関としてはもうセンサス・ビューローですから、勝手にやったことはないですしね。むしろばくは、コントロール・アクトと統計法との関係はどうなっているのかなと、当時疑問に思ったくらいです。指定統計の制度一本でいいじゃないかと思った。が、そうではなくて、指定統計まで行けば一番いいんでしょうけれども、別に義務を伴わないものなのですね、普通の調査は。指定統計になると、答えなきゃまずいわけですが、その辺の強い、弱い程度の差だと思っておりましたけれど、こういう理解でいいんでしょうか。

奥野 立場が違うんじゃないでしょうか。片っ方は、負担軽減のために承認番号をつけるということですから。

小田原 おっしゃるとおりですね。実際に調査員の方と一緒に回ったりなんかよくしていましたけれども、次から次へといろいろな調査に来るとするのは、受ける方では首かしげていますね。そのために会社の中に1つの係をつくっておくとか、担任者を決めておくとかというのは大きな負担ですね。

### 統計委員会の廃止について

奥野 同じ時期に、統計委員会が廃止されて、統計基準局に変わるわけです。これはやはり統計界にとっては1つの大きな出来事ですけれども、統計局の部長をやっていたらして、どういうふうにごらんになりましたか。

小田原 あれは行政管理法――。

三瀦 27年。調査部長になられる直前。

小田原 レポート・コントロールが行われるその年です

ね。何カ月か後ですね。

奥野 統計報告調整法がまだ施行になる前なのです。

小田原 そうですか、あれは。そして統計委員会が統計審議会になる。

奥野 統計委員会がなくなって、行政管理庁の統計基準部になって、委員会そのものは統計審議会ということで、行管の附属機関になります。

小田原 統計法の中に統計委員会の規定があった期間がかなりあるんでしたね。あれは24年ですか。

三渚 統計委員会というのは、統計局側からごらんになって、どういう存在でしたか。うるさい存在でしたか。

小田原 いやいや、とんでもない。大局的に見て、統計委員会というものはやはり大きな働きをしたことに違いはない。ただ、行政委員会（コミッション）というものが日本の制度にあまりなじまなかった。そこで役所的な感覚で、役人というのはどうも、はっきりいって非常にセクショナリズムが強いし、特殊な慣行なりセンスがある。権限なんかを問題にすることも多かったように思いますけれども、もうその後の統計委員会、あるいは行政管理庁の基準局、そういったようなことになった段階では、機能なり役割りなりも定着しましたね。戦前の内閣統計局というのは、ある程度統計委員会的な調整機能を持っておったわけですね。しかしそれは、ああいう機構のままでは十分に機能しない。これは、やはり戦後の強い改革によらなければできなかったわけです。

三渚 川島さんの時代ですね。

小田原 そう、川島さん時代のままじゃ切りかえできなかったでしょうね。だから、何といたって戦後の日本



の統計界にとっては、統計委員会というものができて、そして存分にやって大きな功績を残したということは、これはもう否めないことだった。

ただ、強いていえば、さきにも申したように、たとえば役所同士の、あるいは地方庁との関係、あるいは横の関係などからいって、統計委員会というのは、いかにも役所としては素人的なことがあるんですよ。だから、そういう点で気になるところがあったと思うんですね。しかし、一方から見ると、それだからこそできたんだということがいえます。旧套を追っていたんでは、とてもじゃないが思い切ったことはできない。統計委員会制度が大きな役割りを果たしてきたということは外から見ても十分にわかりますね。もっともこの段階に来た調整機関が、今後どうあったらいいだろうかということは、いろいろまたここら辺で考えてみる段階じゃないでしょうか。

三渚 もう三十何年にちましたからね、統計委員会の成立から。

### 調査部長時代

奥野 調査部長時代については、何か特におありかなアと-----。

三渚 調査部長5年ぐらやっていらっしゃるわけですね、局長になられる前。

小田原 そうですね。

奥野 この時代については、お伺いするテーマがうまく思い浮かばないんですが、何か-----。

小田原 何か思い出すことを申し上げているんですが、

統計局では、さっきおっしゃったように、総務課長は1年、それから経済部長、調査部長を通じまして、何年となっていますか。

奥野 履歴を見ると6年半。

小田原 最後の統計局は7年……。

奥野 統計局長が7年ですね。その前の部長時代が……。

小田原 5年くらいじゃないですか。

奥野 いえ、25年の8月から32年の3月ですから、やっぱり6年半くらいですね。

三渚 経済部長と一緒にだから、通算で……。

小田原 7年、7年の1年で、15年。

奥野 大体そうです。

小田原 それで私の役人生活というのが終わるんですけどもね。通じまして、私の役人生活は30年なんですね。先ほどいろいろ申し上げましたように、いろんなところを飛び回っておったんですが、それが統計局に来てから、ピタッとそこで腰を据えさせていただいたことになるんです。そして、中での地位は、総務課長、それから部長、局長となつたんですが、通じて15カ年といいますと、30年の私の役人生活のちょうど半分。半分は統計局で過ごした。そこで「門前の小僧、習わぬ経を読む」ということで、いつの間にか統計家的な顔をしているんですけども、中身は何もないことは、ご承知のとおりですね。ですから、全体としては、いろいろ教えられた15年間であったと思うんです。

三渚 やっぱり、アメリカに78日いらした、予期せざる出張といったらおかしいんですけども、それが、ずっと統計でいくということの1つの条件でしょうか。

小田原 実は先ほどの、なぜ総務課長になってきたかという点ですが、通産省の雑貨統計課長のときに山本高行次官から、「まあ2年ほど統計局に行ってきてください」といわれた。ところが2年たったころ、思わぬことでアメリカに行ったんですね。アメリカから帰ってきて、ではもうこの辺で、というわけにいかなくなった……。

三渚 そうですね。はい、さよならというわけにはいかない。

小田原 ですから、それが思わざる1つの契機になりましたね。

三渚 事実、向こうでいろいろ勉強なされたこともあるし。

小田原 ですから、考えてみれば、私は本当に思わざることで統計家の端くれになったみたいです。

三渚 そんなことをいえば、小田原さん、有沢先生が統計学を勉強なされたのは、糸井さんという助教授が向こうに行つて、病気で亡くなっちゃって、やむを得ずなんですよ。有沢さんだつて。全然統計学やるつもりはなかったわけですがけれども、前任者の糸井助教授がドイツで病気で亡くなって、やむを得ず……。あのころは命令ですから。「おまえ統計やってこい」ということだったようですからね。そういう偶然的要素というのは、かなり大きな契機ではあるでしょうね。

小田原 それから1つ申してよいことは、政府部内で初めて大型コンピュータを導入して集計を始めたということですね。これは1つの出来事であると思いますよ。一番初めは、30年の国勢調査の集計をやるために入れたのです。IBM705という機械でした。大型電子計算機と

しては第一世代の装置でした。いまではもう第二、三、四世代になっていまいしょうが。これが一番初めだったと思う。たしか気象庁にも1つ、どこぞのが入っている。それと前後したと思うのですが、実質的にコンピュータを使って集計したのは、統計局だったと思いますね。そのときは非常に大変だった。

大型コンピュータというのは、その当時、レミントンランドとIBMという2社が開発していた。そしてレミントンの方は、三井物産の系統が扱ってあったわけです。IBMは、どこというわけじゃないですね。黒沢商会あたりがそうじゃなかったかと思いますが、特定の商社というものはないんですが、レミントンの方は三井物産系のものだから、売り込み攻勢が非常に強いんですよ。ぼくがたとえばアメリカに行ったとなると、すぐすっ飛んでくるのはレミントンです。そして、本社なり工場なりにぼくは連れていかれ、あげくにどこかで昼飯食おうとか、そういうことは、実に至れり尽くせりなのですけれどもね。

三渚 商売上手。

小田原 商売上手。IBMにはそういうところはまずないんです。セールスマンといっても、技師とか機械屋といった感じですね。IBMの本社を訪ねましたけれども、目的は何か、何を見たいのかといったような調子で……。

実は、官庁の中にも「レミントン買ったらどうだい」というようなことをいってくるところもあるし、いろいろあるわけですね。それはやっぱり運動しているわけですね、ロッキードじゃないけれども。(笑)

その中で、私はここで製表部長の友安さんとも相談し

たんですけど、とにかく両社と絶対に仕事以外では交際はせぬ、一緒に飯を食わぬということなどを決めた。それから、純粹に技術的にのみ検討しよう。関係がどうあるとか、だれがどういっておったとかじゃなく、技術的に統計局で研究しよう。やるのは、国勢調査の結果を集計するのだが、その目的のためには、どの機種が一番適当か、その点だけで判断しよう。ひとつ技術陣が、もっぱら技術本位に検討してもらいたい、ということをやったんです。それで、国調の目的のためにはやっぱりIBMがいいということになりました。

名前をいっていいかわからぬけれども、レミントンを買えと行ってきた代議士さんもおったんですよ。しかし、当時の総務長官はなかなか度胸のいい人で、「よろしい、国会方面ならばくはだれとでも相手になるから、思ったとおりにやりなさい」ということでした。そして、あるとき電話がかかって、「話つけたからもういろんな相談はするな、方針どおりどんどんやれ」こういつてくれたんです。

とにかく、きわめて合理的に処理すべきコンピュータの機種選定に際して、最も非合理的な決め方がつきまとったということだね。(笑)

三渚 機種選定というのは記録にもあるでしょう、統計委員会史稿にも。やっぱり、当時としては大きな事件でしたね。

### 統計局長時代——ISI東京大会——

三渚 それじゃ今度は、局長になられて……。

奥野 あとずっと局長時代の方に入りまして、幾つかお伺いしたいこと書いてありますけれども、この辺のところで、審議会のことですか、地方機構の評価ですか、I S I 東京大会などですけれども、ひっくるめて、どうぞ何なりとお話してください。

小田原 1960年にI S Iの東京大会というのがございましたね。これは記憶に非常に残ることですね。ぼくは、実はこれより大分早い時期に森田先生に、お偉い先生方が全部そろっていらっしゃる、この時期にI S Iの東京大会を開こうじゃないですかということを申したことがあります。そのときに森田先生は、そんなことをいっても1人ではとても……というようなことをいっておられたんです。それから間もなく、このことが表面に出てきましたが、これはおそらく美濃部さんあたり中心にして、何か働きかけがあったのかもしれませんが。ぼくはよく知りませんけれどもね。

昭和33年に、ブラッセルでI S I総会がありましたね。あのときは、美濃部さんと私は2人で総会に行ったんです。ちょうど、同地で万国博があった年ですね。万国博などを機会に、ああいう国際会議などを開くんですね。そこで、東京開催のことについて同地で、ルーネンバーグ氏(I S I事務局長)あたりと美濃部さん、私とで、いろいろ話をいたしました。総会の最後の日に美濃部先生が、改めて次の機会を、1960年ですか……、32回I S Iを東京にご招待したい、こういうあいさつをされたんです。満場の拍手でした。あれはどういったのだったかな。そうそう、オン・ビハーフ・オブ・ジャパニーズ・ガバメント——日本政府を代表して招請いたします

——こう発言されたわけですよ。

三渚 こっちの政府との話は、もちろんついていたんでしょうね、予算を出すとかなんとか。

小田原 無論そうです。この正式招請のことはむしろ形式です。それまでにずいぶん事務局とも交渉や打診をしている。

三渚 何か、もう2回ぐらい前から開催の話は出ていたらしいですね。

小田原 そうですか。

三渚 いよいよ本番のときは、大変でしたでしょう。

小田原 本番のときはしかし、無論大変だったけれど、結果的にはあれだけうまくいった総会はかつてなかっただろうといわれたくらい成功しましたね。

その次のISIは、パリでしたけれども、森田先生と私が参りました。パリでは大変歓待してくれて、ごちそうというわけじゃないけれども、みんな、心から歓迎してくれました。「東京のISIはよかった、よかった」といってね。

東京総会の総裁を、皇太子殿下にお願いしたわけですよ。そのときに、後藤正夫さんと連れだって常盤松の宮邸に伺って、1時間ばかり、こもごも国際統計会議ということについてご進講申し上げたんです。そのときは皇太子と美智子妃の両殿下がおでましになりました、われわれの講義を聞いていただきましたね。

そうして、ふたをあけてみると、会議なり、特に交歓の場で非常にご評判がよかった。たとえば、帝国ホテルでの晩さん会あたりで、皇太子殿下もリッパだったが、美智子さんの評判がえらいいいんだね。よく話をされた。

統計の話をするわけですね。外国の学者たちとの話をちゃんと2人とも受け答えをされた。日本のプリンス、あるいはプリンセスは、統計学のことをあんなにもよく知っていていらっしゃるのかということで、ずいぶん驚いたようでしたね。

三瀬　ご進講がよかった。(笑)

小田原　帝国ホテルで晩さん会の始まる前に、控えの間で私がしばらくお話をしたんですが、そのときにまた重ねて、「国際会議はこういう一連のことを話し合います、去年はブラッセルで開かれました」と申し上げた。ちょうど万国博が開催されておって、それも目当てにみんな集まったんです。そうしたら、皇太子が美智子さんを指さして、「あなたが行っていたときでしょう」といわれた。つまり、その前の年ですか、美智子妃殿下は、婚約の話があって非常に困り切っておられたわけだ。光栄とか何とかというものの以上であって、全く質の違った家庭に入る。それで大変な迷いがあられたわけですね。単身で、いろいろ考えてみたいということで、外国旅行に行かれたのでしょうか。アメリカへ行って、それからブラッセルに行って、博覧会を見ておられた。ちょうどその時期だったわけですね。そんなようなことを話しておられて、非常に親しい一刻を過ごされた。

後に、赤坂御苑での春の園遊会にお招きを受けたことがあるんですが、どういうわけか知りませんが、そのときに皇太子殿下が回ってこられて、じっと私を見て、「どこかで会いましたね」とおっしゃったんです。やはりそれは、ISIの大会に出席された印象を両殿下も持っておられたということでしたね。



そういうこともあって、I S I 東京大会は非常に国際的にも評判がよかったですね。成功したと思います。

三渚 ライスさんに勲章をあげたりしたんですね。

小田原 あのかきは、岸さんが総理でしたね。

三渚 I S I の32回大会(1960年)は、窓外では安保騒動なんですよ。

小田原 岸さんのときね。

三渚 ぼくもちょっと顔出したから、内と外は非常に対照的でした。デモが歩いていたと思います。

小田原 あれはNHKホールでしたね。

三渚 開会式はね。会議は産経会館でしょう、あのころ、国際会議場なんかないから。

小田原 産経会館を使いましたね。NHK交響楽団も来たし。

三渚 いまなら国際会議場はいっぱいありますけれどもね。あのころは-----。

小田原 これはしかし、その当時の行政管理局、美濃部さん、あるいは大蔵省とかが協力したわけですね。

三渚 財界の寄付ももちろんあったわけでしょう。

小田原 そしてエンターテインメント、もてなし、接待、実によくやったですね。

## 地方統計機構について

三渚 地方統計機構のことは-----。

奥野 地方統計機構の評価についてお伺いしたいというのは、統計局の仕事は全部、地方統計機構を流れるわけですね。

小田原　そうです。

奥野　ですから、そういうふうにして仕事をやらしている立場から、いまの地方統計機構をどう評価すべきか、あるいは今後どうやったらいいか。その辺のところ、何かご意見がありましたら。

小田原　これはもう、地方統計機構がなければ、その当時統計調査の仕事は何もできなかったわけです。ですから、われわれ統計局に対しては、地方の統計課も非常に親近感を持ってくれて、互いに気持ちよくつき合ってきたと思います、一般的にいて。

むしろ地方の側から、いまも問題になっておるところですが、国の各種の統計調査についていろんな注文を私どもは聞いていました。たとえばここに広島県の「統計の泉」(1963年)誌に載った「地方統計の近代化」というパネル・ディスカッションの記事を読むと、いろんな種類の統計が、政府筋でまちまちに調査をされて、しかもその横の連関がきわめて少なく、非常なムダを各省ともにやっているのではないか、これに対してどうするかといったような質問があります。それから、結果を早く、しかも地方でも利用できるような形で、出してくれといったような意見も出ています。

また、ここにあるのは、ちょうど統計局90周年のときの雑誌ですね。

三渚　1961年11月、雑誌「統計」ですね。

小田原　これに何か出ております。飛び飛びになってすみませんが、ああ、牛塚元局長の訪問記です。

牛塚虎太郎という方は、お聞き及びのとおり、大正9年に第1回の国勢調査をやったときの統計局長だったん

です。後に東京市長等々になられて、非常な手腕を発揮された人でしたが、このころはご郷里の富山県大門町というところに隠棲しておられた。そのときばくは、統計局の大先輩としてこの方をお見舞いかたがたにお訪ねしたんです。このころは白内障で、目が見えない。この写真でも、目は見えていないんです。

三楯 岩手か何か、あちらの方でしょう。小柄な方でしょう。たしか私の父と同期のはずです。

小田原 牛塚先生は明治38年に東京帝国大学法科大学を卒業。そして、岩手、群馬、宮城の知事をされた。後に東京府知事、これが長かったですね。その前に内閣統計局長をやられたのでしょうかね。

この中で私がいろいろお尋ねしたその対談を統計局の関君がまとめておいてくれたんです。その中で第1回国勢調査のことをいろいろ伺いました。大隈重信が登場しますね。古い、明治14年ごろの話ですね。大隈重信は当時参議だったんです。実はこれは、私の小著「統計行政の中に転載していますけれども、あのときに大隈参議の名前で建議書を出しているんです。『現在ノ国政ヲ詳明セザレバ政府則チ施政ノ便ヲ失フ』といった書き出しで、組織を拡大し統計に大いに力を注がなければならぬという意味のことがとうとうと書いてあります。その結果統計院ができたものらしい。私などはそれで、大隈さんという人は、こういうものを書いておられるとは偉いものだな、統計のことわかったのかなアと思っていたんです。

これは牛塚さんによると、統計に関係深いだれかれの連中が、少しは統計のPRぐらいしなければいかぬということで、当時の明治政府の幅さきだった伊藤博文と大

隈重信の2人の名前をかりて、太政官に建白書を出したというわけです。

さて、後年第2次大隈内閣のころ、牛塚さんが内閣統計局長だったのですね。そのころ国勢調査実施の機運も上がっていた。そこで牛塚局長がかつて統計の建議をした大隈さんを訪ねて、国勢調査をぜひやりたいということをお願いしたところ、やろう、カネ出すからやらにゃいかぬとってくれた。ところが、みんな統計の予算ということになると渋いんだね。初めはわかったような顔をしているくせに、いざカネがないとなると、まず統計を削ろうと-----と来る。

三渚 いまでも同じです。

小田原 「そういうときだから、ぼくらが先輩で偉いと思っている人たちが本性をあらわして-----。」(笑) こういうおもしろい話をいろいろとされました。

三渚 それは非常に貴重な対談ですね。

小田原 この対談から間もなく牛塚さんは亡くなられたんです。

「国勢調査のときは歌をつくった。歌でひとつ宣伝しようと思ってやったんです。皇后陛下のところへ、国勢調査の歌なんか集めた本を持って行って、こういう歌がありますと行って、特にお見せしたことがあります」とも話された。

三渚 牛塚さんとはわざわざ対談にいらしたんですか。

小田原 行っただけです。いや、統計大会か何かの集まりがあったついでです。一遍お目にかかっておこうかと思って。

奥野 この時代に統計行政の本をお書きになっていらっ

しゃいますね。あれはほかの本に比べて、非常にユニークな点がありまして、行政法の観点からお書きになったでしょう。

小田原 そういうことですね。

奥野 あれは、反響とか売れ行きは、いかがでございましたか。(笑)

小田原 一般に売れるような本であるはずはないんですけども、養成所でよく使ってくれておりますし、県、市の職員たちにも多少は利用されているかもしれません。だから、版は大分重ねているようですよ。一遍に刷る部数はそう多くはないと思いますけれども、頻繁に版を重ねてくれて、7版くらいになりましたかね。その都度ちょっちょっと-----。

奥野 お直しになる。

小田原 行政法規がしょっちゅう変わっておりますから、そういう点をちょっちょっと直してやっているものだから。今度行政改革があつたら、また直さなくちゃいかぬ。

奥野 楽しみですね。(笑)

### その他のことども

三渚 ちょっと戻るようですが、養成所に加地さんっておられたでしょう。

小田原 はい。加地成雄さん。

三渚 非常に熱心な方で、杉亨二さんのことなんか一生懸命やって、杉さんのお墓を染井墓地で修復したんですか。それもやっぱりあなたの局長時代じゃないですか。

小田原 まだ森田局長のときでしたね。この人は非常な

熱心家で、もともと栃木県かどこかの統計課長をした人です。日本統計協会の仕事をずっとやったんですが、そのときに、東京統計協会と統計学社と2つあったんですが、統計学社の方の仕事——横山雅男さんあたりを助けて、あの雑誌を手伝っておったという人ですね。それで杉さんに非常に打ち込んでおられて、戦争中も、地方に在住しているときでも、鉄かぶとをかぶって、脚絆を巻いて、命日には参ったという奇特な人です。

私がちょうど総務課長をやったときにいまのお話があって、墓を直したい。それに関連して、ばくが、ちょうど統計局80年になるから、ことしはお祝いしようと言って、森田先生も賛成した。それで実現したんですが、そのときの1つの材料に、杉さんの身内の人が、孫さんたちがまだおるといって、探し出しまして、桑井の墓地にご案内して、これは日本統計協会が修復しますからということで、了承を得てやったんです。

三瀧 杉一郎さん。

小田原 杉一郎さんと妹さんたち。

そういうことで、非常に奇特な人でしたね。杉さんの伝記を書きましたね。

三瀧 ご存じのように、杉亨二さんのお孫さん（杉亨二の四男、杉四郎さんの子供さん）に杉栄という方がおりましたでしょう。その男の兄弟の長兄で、杉勇という方がおられるんですよ。今度お送りしようと思えますけれども、その方がたまたま教育大の名誉教授で、私はもと教育大にいましたが、ばくらの研究会で杉勇さんをお招きして『祖父・杉亨二のことども』という、非常にいいお話を伺ったんです。

小田原 その方はどなたですって。

三渚 杉亨二の孫です。つまり亨二の四男の杉四郎さんの長男です。杉亨二さんは子供が十何人いたんですよ。ですから、杉勇さんは杉栄さんのお兄さんになるんです。その方は、オリエント学の方なんですけれども、もう数年前ですが、話を伺った。歴史家なもののだから、長崎にも行かれるし、いろいろ調べられまして、それで、前にちょっとお話しした、諏訪公園の杉亨二の胸像、あれに北村先生が碑文を書かれています。それはもちろん杉勇さんよくご承知でおられたし、大阪の適塾で杉亨二さんは1年勉強した。そんなことを克明に杉勇さんは話してくださいました。

これを拝見しますと、統計局長おやめになってから後、長崎の国際経済大学で統計学の講義を何年ぐらい……？

小田原 10年いたしました。これはできたばかりだったんですけれども、この県立国際経済大学で統計学の先生を求めておったんですね。ちょうど私がこれも招聘を受けて佐世保の銀行に入ることになって向こうに行ったら、だれかが、小田原が近くに行っただけではないか、などという人があって、「私は不適任だから」といったんですけれども、文部省の認可がすぐ通ったんですね。(笑)仕方ないので森田先生のところに行って「どうしますかね？」「やりなさいよ、統計読本ぐらいがいいよ」というようなことになったんです。10年ちょうどやって、くたびれましたんで、退職しました。

三渚 ISIに結局、都合3回行っていらして、東京を入れれば、4回のおつき合いのようですね。

小田原 そうです。4回でしょう。

三渚 ベルギー、東京、フランス、もう1つカナダですか。海外の関係でいうと、53年に中国に行っていていらっしゃるんですね。長崎県親善使節団、これはやっぱり、北村先生の流れといたら、おかしいですけども-----。

小田原 北村の流れは、周恩来あにりがおられるころまででしょうね。もう、ちょっと違っていました。

かつては満州（東北部）にもおったし、帰ってきてからも、北支中心によく行っておったものですから、どうなっているかなと思ってプライベートな気持ちで訪問したんですが、結局は、やはり非常に変わっておったですね。特に北京の方はね、上海はあまり変わらぬなという感じを持って帰りました。あれは行ってみないと、どうしてもわかりませんね。

三渚 奥野氏も中国に-----。

小田原 ああ、行かれたに-----？ いつごろですか。

奥野 初めは、53年の梅雨のころ、6月です。それから、2回目は56年の3月末です。

### 官庁統計の将来について

奥野 一番最後にこのメモに書きました、その他のところですけども、何かございますか。現在及び将来の官庁統計についてのご意見、あるいは、特にしなれば、国勢調査なんかは統計局の所管ですから。

小田原 その後はことに不勉強だから何にもわからなくて-----。

三渚 さっきちょっとお触れになった、統計法があって統計報告調整法ができたわけですね。そのことについて、



ようやくいまごろになって、統計の法体系というものが  
てんでんばらばらじゃないかということを問題にし出し  
たようですね。先生ご承知のように、いま統計がいろい  
ろやりにくくなっただという状況のもとで、三十何年前の  
法体系を少し見直すということをやっているようですね。

しかし、やっぱり統計局というのは、一時、中央統計  
局にしようとかいう話がありましたけれども、伝統のあ  
る人口統計、その他を扱う統計局というのは、日本では  
いまの姿の方がふさわしいんじゃないでしょうかね、い  
わゆる中央統計局になるよりは。

小田原 いまは、試行錯誤を行いながらここまででき上  
がってきましたし、何か、初めの統計制度改正に関する  
委員会のご答申の冒頭にも触れておられたように、中央  
統計局ないし統計院をつくって、内閣の有力な機関とす  
べしという意見もあるが、一挙にはむずかしい、当面は  
やはりそのままでいき、かたがた統計委員会あたりの機  
能にまとう、として答申を出されましたね。やっぱりそ  
れはまだいまでも同じ事情じゃないかと思うんですね。  
だから、純粹に、大きな意味での調整をし、あるいは計  
画を立てるという働きをするところがあってもいいです  
ね。

ただ、いまとなってみると、統計法ができ、統計委員  
会事務局というものがあって、いろんな調整事務をやっ  
てきた。それは、ある程度一段落したような感じがしま  
すね。現に、指定統計というのは初めの数年間にほとん  
ど全部出尽くしていますね。

三猪 そうですね。現在百幾つで大体出尽くしたよう  
です。

小田原 あとは、ほとんどりょうりょうたるものでしょう、新しいものというのは。

それはいまちょっとお触れになったが、体系的に一応網羅してきた、あるべき統計は一応できているという意味において、下火になってきたのか、あるいは、そうではなくて、あれは各官庁から指定申請が出てきたものについていい悪いといっているんで、積極的にあるべき統計を体系的につくってないですね。

三渚 受身というか……。

小田原 ですから、むしろあるべき統計の構図というかプランというかはこっちでつくって、そしてこのところが1つあいているとか、あるいは大きな意味で、もっとああいうところをやりなさいとか、そういったような検討をする。統計基準部（現在の統計主幹）はそういう1つの機関だと思うし、必要な統計があるかないかを検討するのも1つの問題だと思いますね。

ついでに申し上げると、最近統計調査がやりにくくなってきたといっているし、また一方では、統計的な関心がかなり高まってきておる、あるいはコンピュータ、マイコンが盛ん、こういうことになってきて、やっぱりこれは、根底に統計知識があるはずなんだけれども、本当にそれがあるのかないのか。どういう統計的な考え方が一般に出てきているのかどうかという点の検討もあると思いますね。

そういう意味において、統計思想というか関心というか、そういうものは、いまの段階においても、あるいは別の視点から、別の角度からでも高める必要性があるんじゃないかという気がしますね。

三渚 統計教育ですね。

小田原 私は、いわゆる生涯教育的な観点からでもいいと思いますね。子供のときから大人になったときまで含めて、統計に対する関心を育成していく。

統計というと、たとえば、近ごろ学校で、偏差値でどんどんやっていく。ああいったことも含めて、みんな簡単に偏差値、偏差値といって、優劣が決まってくる。だから、1つのレベルは高くなっているのかもしれない。その高いレベルにおいて、統計についての思想を育てていくことが必要じゃないかという気がします。

三渚 それは、ライスさんのスタティスティカル・マインドですか、それが本当に根づいているのかどうか。

というのは、これはたまたまですけれども、全国統計教育研究協議会、これは会長が有沢さんなんです。各都道府県統計教育研究協議会というのがあって、その中央的なものが全統研なんですけれどもね。いまおっしゃった、統計教育を盛んにする——生涯教育はもちろんだけれども、学校教育の中での統計教育の位置づけというのが、非常にあいまいといいますか、ちょっと考えても、すぐ数学的な確率論とか偏差値ですね。

しかし一方では、社会科学の中での統計教育というのが本当は中心になるべきだという人がいる。また一方では、数学者で数理的処理というのに非常に重点を置く人と2つの考え方がある。

小田原 いま、「統計」というのが数学の教科書の中にあるんですね。

三渚 あるんだけど、度数分布から入っちゃう。それは偏差値は教えるけれども、統計の本当の問題は、社会科学

教育の中での統計。統計の必要性というのは、数学だけでは教えられない。やっぱり、合理的な経営とか行政には統計が必要だ。統計調査というのは、さっきもおっしゃったように、ありがた迷惑そのものでしょう。何もお返しはないし、プライバシーは聞くし。だが統計は必要だというのが社会科の中での統計教育だと、私は思うんですけど。

小田原 そうか。教えるところがないんだな。

三瀨 それはいろんなところにちりばめてはあるんですけども、体系的に統計教育というのが、義務教育、あるいは高校教育の中で位置づけられていない。残念ながら独立單元じゃないものですから、そういういろんな問題があるようですけども、だんだんに盛んにはなっているようです。

小田原 さっきの国際経済大学をもう前にやめたんですけども、学生が来ていうんですよ。彼らの話だと、先生の統計学は漫談ばかりで、われわれも覚えてますよ。

(笑)ところが今度からの先生は、数学の先生だから……。

三瀨 ㊀ばかり。

小田原 一番初めから、バーッと数式。だからみんなまいっというから、こんなことでまいっちゃダメだ、いまの統計はこういうふうになっているんだから、がんばれとっておきました。(笑)

三瀨 どうもありがとうございました。